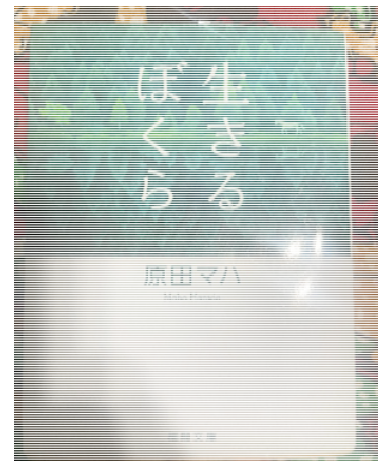


# 生きるわたしたち

Salama tompoko ! (マダガスカル語で、こんにちは！)

私は、2019年に熊本大学法学部を卒業し、福岡市役所に入庁しました。現在は休職し、途上国の人々の生活向上に貢献したいという思いから、アフリカのマダガスカルという国で JICA 海外協力隊として活動しています。

タイトル「生きるわたしたち」は、原田マハさんの小説「生きるぼくら」からインスピレーションを頂きました。稲の成長とともに、主人公の人生という名の少年が少しずつ彼自身の「人生」や農業・仲間などに対して前向きに、そして真正面から向き合っていく姿を描いている小説です。



農業、引きこもり、認知症…現代の日本が抱える問題が鮮やかに描かれているこの物語を、私は「後発開発途上国」とされるマダガスカルで読みました。

この物語の中で、人生は自然に身を委ねるコメづくりを学んでいきます。それはまさしく、マダガスカルで営まれている農業そのものです。

農業離れが加速する日本とは違い、マダガスカルでは国民の大多数が農業で生計を立てています。農業以外の職に就くことが難しい現実もあるのかもしれません。

主食として、1人当たり年間約120kg(日本の約2倍)の米を消費するマダガスカル。雨季と乾季の季節の移ろいの中で、ハリケーンが来ようと毎日大雨が降ろうと、人々は日々田んぼや畑と向き合っています。



私がマダガスカルに来てから約半年が経った中で、気づいたことがあります。人々は何が起きても、どのような現実直面していたとしても、「しょうがない」と言い、淡々と受け止めるのです。私だったら、自分の思うようにならないことに対し、どうすることも出来ないと分かっているもののどこか焦燥感を覚えます。

人々は日々の営みの中で、自然と共に生きるということを実践しているように感じます。私は、「生きるぼくら」とマダガスカルで暮らす人々の中には、「自然と共存する」という、共通する大事な価値観があることに気づきました。値段の振れ幅はあれど、いつでも同じ野菜や果物が買える福岡市に住んでいた時にはあまり意識していなかったことです。マダガスカルの人々に限った話ではないとは思いますが、農業地帯で生活することが初めての自分にとっては、とても大切な気づきでした。



普段利用するマーケット



同僚の農村出張に同行した時の、目的地までの道のり

旬の野菜や果物を自分たちで育て、自分たちで食す。余裕があれば、マーケットで売る。収入向上の面から言えば、マーケットへの出荷促進が望ましいのかもしれませんが、人々は穏やかな時間の流れの中で、家族とともに自給自足の生活を送っています。そんな彼らの姿を見ていると、「足るを知る」という言葉がぴったりなのではないかと感じる日々です。たまに、「貧しさ」の概念が分からなくもなります。

農業に休日はありません。とある日曜日、私の住む町から首都・アンタナナリボへ向かうバスの車窓からは、朝早くから田んぼの中で楽しそうに稲の収穫に励む人々の笑顔が見えました。

一方私は、異国での生活で無意識のうちに気を張りすぎているのか、ただでさえ酷い肩こりが更に酷くなってしまっています。これからは、こちらの人々のようにもう少し肩の力を抜いて生きることを心がけたいです(そもそも、意識してやるものではないのかもしれませんが)。 右写真)とうもろこし。私の身長倍ほどの高さでした。



最後になりましたが……。

マダガスカルは、経済面からみれば最貧国であることは間違いないと考えます(国民の約79%が、1日1.9ドル(約280円)以下で生活しています。出典:2021年世界銀行データ)。この国では昔ながらの手法で農業が営まれているため、農作物の栽培や収穫量は、天候に大きく左右されます。また、特に農村地帯ではコンクリートではなく、木でできた隙間だらけの家に住む人も沢山います。水道も電気も通っておらず、川や井戸で生活用水を確保している。そのような生活を目の当たりにすると、今日(こんにち)、世界中で喫緊の課題となっている気候変動の影響を最も顕著に受けるのは、彼らのような人達なのだろうと思わざるをえません。しかし、そのような環境の中でも、人々は笑顔と見返りを求めない他者への優しさをもちながら、1日1日を確実に生き切っています。

確かに、お金の余裕は心の余裕に繋がると思います。しかし、経済指標と心の豊かさは決して比例するものではないと、マダガスカルで笑顔や優しさに触れるたびに強く感じています。

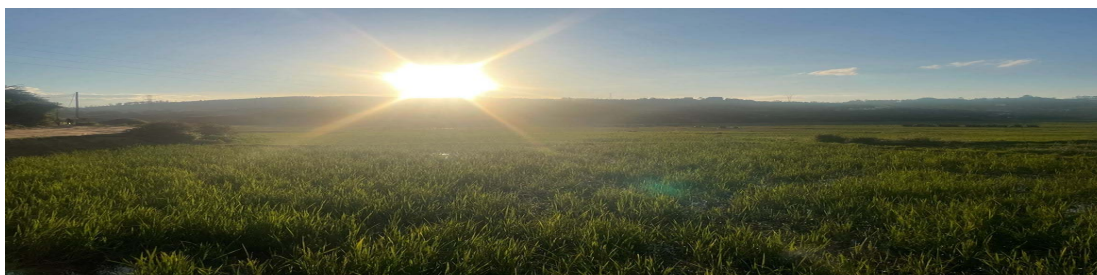
日本に住んでいると、マダガスカルの情報に触れることはほとんど無いと思います。このエッセイを通して、私のフィルターを通して見えたマダガスカルがどういう国なのか、どのような人々がどのような暮らしを送っているのか、未知の国であろうマダガスカルへのイメージが少しでも皆さんの中に生まれたら幸いです。



最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

Misaotra betsaka.

(マダガスカル語で、ありがとう)



兼子 莉恵

2019年卒業